

## 新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

### 『工学部ヒラノ教授の中央大学奮戦記』

今野浩 著 | 青土社、2017、196pp.

本書は、2011年の発売以来、スマッシュヒットとなっている『工学部ヒラノ教授』シリーズの近著である。主人公であるヒラノ教授が東京工業大学を定年退官し、中央大学理工学部に移ってからの10年間の奮戦ぶりをユーモラスに、かつ、大学や学生への愛情たっぷりに紹介している。大学運営上の裏話などもちりばめられているので、我々大学人にとっては様々な意味で興味深い。

ヒラノ教授は、もともとオペレーションズリサーチ(数理最適化理論)を専攻しており、その後、金融工学に参入した人物である。したがって、工学と経済学の間領域を守備範囲としてきたのだ。だが、諸般の事情から、どうも経済学(者)のことがあまり好きではないらしい。経済学部(文系) VS 工学部(理系)のカルチャーの違いは、シリーズ全体をつらぬくひとつの重要な視角となっている。逆にいえば、理系人の目に文系カルチャーがどう映っているのか、本書(本シリーズ)を通じて窺い知ることができる。

近年、国立大学において人文社会科学系は窓際に追いやられつつある。実際、国際的な存在感について、多くの指標で文系は理系の後塵を拝している。今後、理系に劣らぬ人文社会強国を築き、日本のアカデミズムがより均整の取れた形で世界に貢献していくためには、我々が本書から学ぶべきことは少なくないように思う。

評／『彦根論叢』編集委員／近藤豊将

### 『Inequality and Finance in Macrodynamics』

B. Bökemeier and A. Greiner 編著 | Springer、2017、270pp.

本書は、タイトルの通り、マクロ動学理論をベースにして不平等や政府債務問題などを扱っている。Springer社から刊行されている『Dynamic Modeling and Econometrics in Economics and Finance』という研究書シリーズの最新刊である。

編著者は、独国Bielefeld UniversityのBettina Bökemeier博士とAlfred Greiner教授である。前者は、女性であり、最近結婚されて名前が変わったようだ。旧姓はFinckeで、この名で後者のGreiner教授と数冊の共著がある。本書は、おそらく結婚後初の出版物ではなかろうか。後者のGreiner教授は、100編近い専門論文、10冊を超える専門書、そしてドイツ語での教科書まで執筆されている大変に生産的な方である。ご専門はマクロ財政学や環境経済学で、マクロ動学モデルを巧みに用いての研究が特長的な方だ。

そのようなお二人をはじめ、総勢16名の研究者がスクラムを組んで生み出したのが本書であり、多くの方に大いに期待して読んでいただきたいところである。ちなみに、日本からの執筆者もひっそり、ひめやかに、そしてしのびやかに存在している。私である。縁あってGreiner教授から声をかけていただき、執筆に参加させていただいたのだ。累積政府債務問題の深刻さについて世界のトップをひた走る日本からも執筆者を加えようと思われたのだろうか？ともあれ、ぜひ一家に一冊ご購入のうえ、書斎の飾りに…ではなく、ご愛読くださいませ(約二万円也)。

評／『彦根論叢』編集委員／近藤豊将

